

都道府県・指定都市番号	3	都道府県・指定都市名	岩手県	研究課題番号・校種名	1 幼稚園
研究課題	幼稚園教育要領の趣旨等の実現に向けた評価方法の工夫、及び評価に基づいた指導内容や指導方法の工夫改善に関する実践研究				
ふりがな 幼稚園（園児数）	はなまきしりつはなまきようちえん 花巻市立花巻幼稚園（82人）				
所在地（電話番号）	〒025-0076 岩手県花巻市城内 10 番 5 号 電話：（FAX）0198-23-5301				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.city.hanamaki.iwate.jp/ （花巻市ホームページ）				
研究のキーワード	教育課程改善のプロセス 記録の工夫 ティームでの評価 指導力向上 評価の妥当性や信頼性				
研究結果のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連を明確にした記録及びティームによる評価を行い、教育課程改善のプロセスを明らかにした。 ○ 幼稚園教育要領を踏まえた教育課程と教育評価の改善を重ね、本園における妥当性や信頼性の高い評価の在り方を追究した。 				

1 研究主題等

（1）研究主題

「育ちと学びをつなぐ保育を目指して」
～ティームでの評価を生かした教育課程の編成～

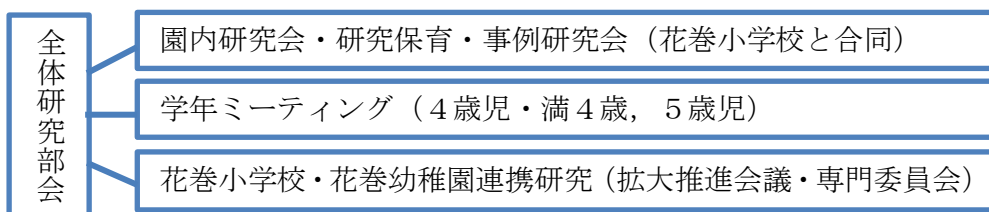
（2）研究主題設定の理由

本園は「げんきな子」「やさしい子」「かんがえる子」を教育目標として掲げ、その子らしい育ちと学びを支えることを大切にした指導に努めている。幼児一人一人が主体的に遊び、生活する姿から育ちと学びを捉え、具体的な指導の省察を積み重ねている。この指導の検証・評価をそれぞれの取組に適したまとめ（各学年や全担任、全教職員…以下「ティーム」）で行うことは教育の質の向上につながると考える。

本園における教育評価の「評価項目」は教育課程の「期の経験内容」と同じであることから、幼稚園教育要領に示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下「育ってほしい姿」）を踏まえて評価の妥当性や信頼性を高めていくことは、教育課程の改善につながることと考える。

そこで、幼児一人一人の具体的な姿から指導を検証していく過程において、「育ってほしい姿」との関連をより明確にした記録と、指導の評価を工夫すると共に、幼稚園教育における幼児の発達や学びの連続性を小学校教員等と共有しながら研究を推進していくこととした。幼稚園教育要領と幼児の実態を踏まえた教育課程の編成と教育評価の改善を積み重ね、本園における妥当性や信頼性の高い評価を目指し、この主題を設定した。

(3) 研究体制



(4) 2年間の主な取組

平成29年度	<ul style="list-style-type: none">○教育課程及び長期指導計画と評価項目の見直し, 改善○実践事例の集積と分析・考察 (指導内容や指導方法の検証)○教育評価の評価表及び評価会議の改善○チームでの評価を指導計画の指導内容に反映○教育課程及び指導計画と評価項目の改善○実践に基づく研究成果の検証
平成30年度	<ul style="list-style-type: none">○教育課程及び長期指導計画と評価項目を見直し, 改善○記録の工夫とそれを生かした短期指導計画の改善○短期指導計画を基にしたチームでの指導検討○日々の実践をチームで評価し, 指導の改善を短期・長期指導計画に反映○実践事例の集積と分析・考察 (指導内容や指導方法の検証)○幼児の学びの姿と教師の指導の有効性を外部へ園・学年・学級便りで発信○実践に基づく研究成果の検証

2 研究内容及び具体的な研究活動

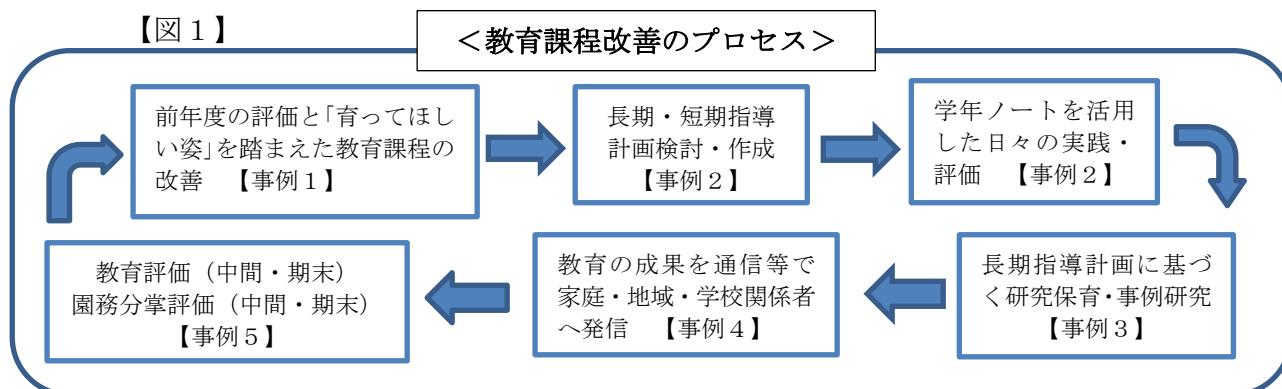
(1) 研究内容

<教育課程の改善のプロセス> 【図1】

- ・ チームでの評価を生かし, 日々の実践から幼児の育ちと学びを検証し, 幼稚園教育要領を踏まえた教育課程と教育評価の改善を積み重ねていく。(1年次・2年次)
- ・ 小学校教員との実践検証を通して, 指導計画の改善を教育課程に反映する。(2年次)

<評価の妥当性や信頼性の確保>

- ・ 「育ってほしい姿」を踏まえ, 幼児の具体的な姿から学びを深く読み取るための記録と, チームでの評価方法の工夫により, 評価の妥当性を高める。(2年次)
- ・ 実践における幼児の学びの具体的な姿を家庭や地域, 学校関係者に分かりやすく発信し, 運営や指導に生かしていくことで, 評価の信頼性を高める。(1年次・2年次)



(2) 具体的な研究活動

実践事例『教育課程改善のプロセス』（5歳児六期の改善の流れの具体例を抜粋）

【事例1】前年度の評価と「育ってほしい姿」を踏まえて教育課程の改善をする

入園（一期）から修了（八期）までの育ちを見通した教育課程となるよう、つながりを吟味し、全教職員で、全ての文言の精選と捉えの共通理解を図る。

改善のポイント①昨年度の評価から②「育ってほしい姿」から

教育課程・二年保育5歳児 ※領域「言葉」抜粋（㊟…「言葉による伝え合い」）

① 七期「ストーリーの楽しさを感じ取り、友達と共感し合いながら絵本・紙芝居・物語等を楽しむ」を六期へ
 六期は自分の思いや考えを伝え合い、友達と一緒に目的を持って遊ぶ楽しさを感じながら友達とつながる喜びを味わう経験を重ねていく指導の重要性を再確認。そのきっかけとしてストーリー性のある絵本等を友達と共感し合えるような指導が有効であることが明確になった。

② 八期に「言葉により伝え合いを楽しむ」を新たに加えたことで各期のつながりを見直す。
 昨年度七期にあった「相手の言葉を共感的に受け止めてその内容に応じたやり取りを重ねる」は教育評価においても「共感的に受け止める」だけでなく、「相手の気持ちに気付く」ようになるような指導が必要であることが明確になった。

期	五（年長児としての安定） 4～5月	六（つながりを求め、深めていく） 6～7月	七（友達の中での自己発揮） 9～12月	八（クラスの中での自己充実） 1～3月
内容（言葉）	<ul style="list-style-type: none"> ㊟感じたり、考えたりしたことを言葉で表し、相手に伝えようとする ㊟教師や友達の話にも関心をもって耳を傾け、内容を理解しようとする 	<ul style="list-style-type: none"> ㊟相手の話が分かる楽しさや喜びを味わう ㊟ストーリーの楽しさを感じ取り、友達と共感し合いながら絵本・紙芝居・物語等を楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> ㊟友達と思いを伝え合う中で、相手の気持ちに気づき、受け入れようとする ㊟友達の話に注意を向けて聞いたり、自分の思いを相手に分かるように工夫して伝えようとする 	<ul style="list-style-type: none"> ㊟互いの思いや気持ちを伝え合い、受け入れ合う心地良さや喜びを味わう ㊟様々な状況に合わせた言葉を使おうとする ㊟友達との対話を楽しみ、伝え合う喜びを楽しむ

【事例2】学年ノートを活用し、チームで評価する

日々の記録を付箋に書き、チームで学年ノートに貼る。幼児一人一人の捉えの根拠となる考え方を付き合わせて分析し、必要な体験が積み重なるよう有効な指導について話し合う。

進級当初より、A、B、C、D児の4人は一緒に遊ぶようになるが遊びが継続しない。6月に入ってからほぼ毎朝のように、登園するとサッカーや雲梯を始めるが、その後は周りの友達の遊びを見て回っている。

＜学年ノートから幼児の姿や教師の援助を捉え、チームで評価する＞

- ・自分たちの新たな遊び、自分たちだけの物や拠点を求めて模索しているのではないか。
- ・遊びの目的やストーリー性が共通になるような教師の援助が必要なのではないか。
- ・4人が「やってやるぞ」という思いを共有し仲間を力合わせて遊びを続けたいようになるきっかけがほしいのでは。

＜学年ミーティングや日々の評価を短期指導計画に反映する＞

- ・自分たちだけの場を作って遊び出す楽しさが味わえるよう、一人一人の興味や関心をくみ取りながら遊び出すきっかけ作りをしていく。絵本やお話からイメージを引き出したり表現したくなる用具や材料を提示したりしていく。
- ・自分たちで考えを出し合って遊びを進めていこうとする姿を継続的に見守り、相手に思いや考えを伝えたり相手の話を聞いたりする姿を必要に応じて支え、イメージが重なっていく楽しさを味わえるようにしていく。

【事例3】研究保育，事例研究で評価する

※ 研究保育の実践を検証する（抜粋） Tのかかわり

6月14日 A児の興味が恐竜であることを捉え、さりげなく恐竜の絵本を棚に置く。
 するとA児は絵具で恐竜を描き始めた。すぐにB、C、D児も仲間入りする。お互いの色が混じり合い、より本物らしい恐竜の絵になり「僕たちの恐竜が出来た。」と喜び合う。自分たちの描いた恐竜の絵を外倉庫の壁に貼り、恐竜化石研究所とし、ドアや看板を作り出そうとしていた。しかしD児は、遊びから抜ける。
 6月19日 研究所の隣で川作りをしていたグループが築山から大きな石の塊を掘り出し、「なんか出てきた。すごい。」と歓声をあげている。一緒に川作りをしていたサポートTが「これ、研究所で調べてもらおうよ。」と声をかけると「いいねえ。」と運んでいく。
 A児たち3人「おおーすごい。」と興味を持って集まる。その様子を見て、D児も「何これ？」と寄ってくる。それをきっかけにした仲間の中に入る。「洗ってみよう。」「おー何か見えてきた。」「何これ？」「もっと水。」と水をかけて土を落とし始める4人。
 川作りのグループが「これはなんの化石ですか。」と聞く。B児「これはただの石です。」と答える。
 サポートT「どうやって調べたんですか。」その言葉に川作りをしていたE児も「調べてないんですか。」「え、パソコンもないんですか。つまらないですねえ」と呟く。
 それを聞いたA児たち4人は、顔を見合わせて考え込み、パソコンを作り始めようとする。

＜事例研究会で評価する＞

- ・友達とイメージや考えを共有する喜びが味わえるよう、教師は意図的にさりげなく関わった。自分たちの遊びの目的やストーリー性が生まれ、遊びを見通しながら一緒に遊びたい、もっと遊びを続けたいという姿を引き出すように、幼児の必要性を見極めた環境の再構成や援助が有効だった。
- ・友達とイメージがつながり、一緒に遊びたいという思いを持った時に言葉が多く出ている。面白そう、もっと遊びを続けたいという思いから、友達と思いを伝え合おうとする姿につながっている。

【事例4】幼児の学びの姿を学級便り・園便りで発信する

遊び、生活する姿から、幼児がどのような体験をし、何を学んでいるのか、チームで分析したことをドキュメンテーションで伝える。(家庭や小学校、地域等へ届け、情報共有する。)

【事例5】教育評価(中間)を教育課程に反映させ、改善を図る

事例2～4を教育評価(中間)につなげる。どのような指導を大事にしてきたか、全教職員が記述したものを取りまとめて検討し、指導の改善に生かす。

教育評価(中間) ※六期の一部抜粋

教育目標の重点目標	人の話をよく聞き自分なりの言葉で伝える
評価項目(期の経験内容)	相手の話が分かる楽しさや喜びを味わう
<ul style="list-style-type: none">・時には時間をかけて伝え合う場面を意図的につくることも大事。もっと丁寧にやりとりを見ていきたい・学級便りがきっかけで自分の気持ちや考えをもっと伝えようしたり遊びをより楽しくしようしたりしていた。・相手の話が分かることは決して楽しいことや嬉しいことと限ったことではない。嫌だ、不快だと思うことも受け止めていけるよう支えていく援助が有効であった・この時期は、相手の話が分かる楽しさや喜びを味わう前に、言い合える関係作り、自分の思いや考えを言いたくなるような状況作りに重点を置いた指導が必要ではないか。	

『六期の評価項目(期の経験内容)』を改善する

自分の気持ちや考えを言葉で相手に伝えたり、相手の話を聞いたりして、遊びを続けようとする

3 研究の成果と課題(○成果●課題)

- 昨年度の教育評価を踏まえて教育課程を改善し、チームで幼児の具体的な姿から一人一人の育ちと学びを捉え、指導の改善を継続して行った。更に今年度の教育評価において期毎に指導の再検証をし、幼児の育ちと学びのつながりを吟味しながら教育課程を改善していくという、本園の教育課程改善のプロセスが明らかとなった。
- 「育ってほしい姿」を踏まえた教育課程の改善の過程において、チームで教育課程の全ての文言の意味を幼児の具体的な姿や指導の改善と照らし合わせて精選したことで、全教職員が教育課程を共通理解できた。
- 学年ノートを活用した日々の評価を短期指導計画に反映したことで、学年ミーティングでは深い幼児理解を基にした指導の改善が可能となり、指導の方向性を共有することにつながった。このような教師同士の学び合いが、幼児が主体的に遊び、生活する姿を捉え、適切な援助を行うなど指導力の向上となった。
- 教育評価(中間・期末)において、日々の評価の積み重ねが根拠となって研究保育等で期毎の有効な指導を再確認し合うこととなり、妥当性や信頼性の高い評価につながった。
- 小学校教員と「育ってほしい姿」を視点に幼児の具体的な姿から育ちや学びについて話し合いを重ねたことは、課題を共有し、円滑な接続のための指導の改善につなげる上で大変有効であった。今後も教育課程を改善していく過程で小学校や家庭、地域等の視点を取り入れ、豊かな実践につなげていくことが課題である。

4 今後の取組

教育課程改善のプロセスを基にし、更に家庭や地域、学校関係者等と連携し、社会に開かれた教育課程の実現を目指して教育課程の改善を積み重ねていく。

5 研究協議会の中で協議したいこと

評価の妥当性や信頼性を高めるための工夫と、教育課程の改善への活用。